

「聖別された第七の日」

2020年10月07日

こうして天と地、そしてその森羅万象が完成した。第七の日に、神はその業を完成され、そのすべての業を終えて休まれた。神は第七の日を祝福し、これを聖別された。(創世記2章1～3節a)

神は、六日間を費やして森羅万象を完成させた。この創造神話は、二つのことを強調している。一つは、神は愛する人間を造り、人格的対話をすることを創造の最終目標にした。二つは、その創造は秩序正しくなされ、被造物全てを「良し」と是認したことである。

神は創造の業を終え、第七の日に休まれた。神は休まれた第七の日を祝福し、聖別された。聖別とは、他の日とは違う意味を持たせたということである。イスラエル人は、第七の日を「安息日」とした。その安息日が、モーセの十戒の第四戒に下記のように規定されている。「安息日を覚えて、これを聖別しなさい。六日間は働いて、あなたのすべての仕事をしなさい。しかし、七日目はあなたの神、主の安息日であるから、どのような仕事もしてはならない。あなたも、息子も娘も、男女の奴隷も、家畜も、町の中にいるあなたの寄留者も同様である。主は六日のうちに、天と地と海と、そこにあるすべてのものを造り、七日目に休息された。それゆえ、主は安息日を祝福して、これを聖別されたのである。」神は七日目を聖別して安息日としたので、仕事をしてはならない。それは、家族、奴隷、家畜、寄留者も同様である。この規定が人間回復を約束したのである。

昔、日本の農村では、「正月三日、盆二日」と言って、休みは年に五日だった。丁稚に出された奉公人は、年に一度の「藪入り」が休日で、その日に実家に帰るのが唯一の楽しみだった。貧しい人、雇われ人は、休みなく働かなければならなかった。日本の一般的なサラリーマンは、日曜日が休みで、土曜日が半ドンだった。経済成長が、週休二日をもたらしてきた。しかし、現在も、働き過ぎで「過労死」する件は途絶えることがない。休みのない労働は、自分を見失い、自死も招きかねないことは、皆が聞き知っている。イスラエル人は六日働いて、七日目を、必ず休みとした。これは、人間を守ろうとする知恵である。まず、六日働けば、飢えることなく、神は守ってくださいと信じた。イスラエル人がエジプトし、荒れ野に入った時、飢えと渇きに見舞われた。神は毎日天からのパン（マナ）を降らせて養われた。不安に思って、多く集めた人のマナは虫がつき、食べられなかった。六日目は倍のマナを集め、労働が禁止されている安息日に備えた。第七の安息日にはマナは降らなかった。六日働けば、飢えることなく、神は養ってくださいとの諭しである。そして、安息日は単なる休息ではなく、神の安息に招かれて、神礼拝のための特別に聖別された日とした。神の前に立ち、神の言葉を聞いて、自分とこの世を心静かに捉え直す。体を休め、神に聞き入ることによって、心と体を回復させるのである。

この安息日の規定は、貧しい民に許されることではない。安息日の戒めが守られるようになったのは、バビロン捕囚時代からだと言われている。捕囚とされた奴隷には休みはない。彼らは神への礼拝を捧げるため、第七の日には労働をしないと抵抗したのである。

創造神話は、神の秩序ある支配と七日目の休みを主張し、人間の尊厳を勝ち取る抵抗のメッセージにしたのである。キリスト教は、主イエスの復活を記念して、週の初めの日曜日を礼拝日とした。多忙と情報過多の現在、自分を取り戻し、生きる道筋を示されるために、神の言葉を聞く礼拝は、何より重要ではないか。